

平成 26 年度福山大学第 3 回 FD・SD 講演会報告

大学教育センター教育開発部門

平成 27 年 3 月 17 日（火）、午後 2 時から 2 時間にわたり、平成 26 年度福山大学第 3 回 FD・SD 講演会を 34 号館薬学部棟 3 階のマルチメディア室 1,2 で実施しました。講演会のテーマは、「ルーブリック評価入門—時短・ブレない・公平な評価方法—」であり、講師には大阪大学教育学習支援センター・副センター長の佐藤浩章先生をお迎えしました（写真 1）。参加者数は、専任教職員 129 名でした。



写真 1 講師の佐藤浩章先生（大阪大学教育学習支援センター・副センター長）

佐藤先生は、ルーブリック評価に関する講演・研修を大阪大学のみならず、他大学でも数多くお引き受けになっており、2014 年には『大学教員のためのルーブリック評価入門—ブレない時短・楽チン成績評価のススメ—』（玉川大学出版部）を監訳出版されるなど、日本の第一人者としてご活躍なさっておられます。また、日本高等教育開発協会の副会長として、日本の高等教育機関の教育と学習の質の向上に貢献しておられます。

大学設置基準第 25 条の 2（成績評価基準等の明示等）では、「大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。」と定められています。佐藤先生は、最初にこの法令を提示され、客観的で厳格な評価の重要性とルーブリック評価の関連性について、事例を含めながら簡潔で明快、しかも本質を的確に紹介されました。ルーブリック評価を取り入れている者、取り入れるために学部 FD を行った者、名前は聞いたことがあっても内容まで理解していなかった者、これらすべての教職員が最初の段階から大きく引きつけられた講演

でした。

最初の1時間は、ループリック評価の必要性、目的、種類、作成方法、具体例などの紹介でした。今回使用したマルチメディア室1, 2は、講師が中央のコントロール室からピンマイクで講演を行い(写真2)、参加者は講師の声をスピーカーから聞き、提示資料は前方のスクリーンで確認する環境でした。また、後半のループリック作成作業用のPCが、講師に背を向ける形で配置されているため、参加者は講師に背を向ける形で座していました(写真3, 写真4)。



写真2 佐藤浩章先生のコントロール室からの講演風景



写真3 マルチメディア室1の状況

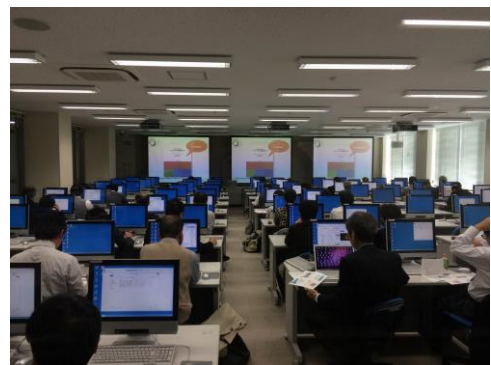


写真4 マルチメディア室2の状況

講師の佐藤先生も初めてという環境でのご講演でしたが、参加者は提示される PowerPoint と説明に集中している様子が見受けられました。「なぜループリックを使うのか?」というスライドでは、「評価がぶれない」「異なる人が評価しても同じ結果が得られる」「成績評価にかかる時間を節約してくれる」「判読可能で、意味のあるフィードバックを、タイミングよく与えることができる」「学生に期待されていることについて、課題提出前に教員・学生間で共有できる」「結果だけでなく、プロセスも評価できる」「学生が自らの学習活動を評価できる」「学生自身が、どの程度まで努力すればどのような評価がもらえるのか、行動指針が明確になる」などの理由が示され、その有用性を身近に感じることができました。

講演会の後半は、予め電子ファイル（佐藤先生提供）で配布していた、3段階尺度のルーブリック表を利用して各自が30分で作業をしました。作成するものは自身のシラバスに基づく科目ルーブリックが主でしたが、中には課題（レポートやプレゼン資料）ルーブリックやカリキュラムルーブリック（学士課程全体を通した汎用的ルーブリック）に取り組む教員もおり、作業中に講師の佐藤先生を呼び止めてのディスカッションが数多く生まれていました（写真5）。



写真5 ルーブリック作成中の状況と佐藤浩章先生とのディスカッション風景

30分の作業後、2名がペアとなり、お互いの作成したルーブリックの記述に対し、どのような意味か、学生に何を求めているか、初見でわかりにくいところなどを10分ずつ交代で意見交換しました。議論はとても活発に行われ、この間も講師の佐藤先生は、休み無く参加者の具体的な質問に対応されていました（写真6）。

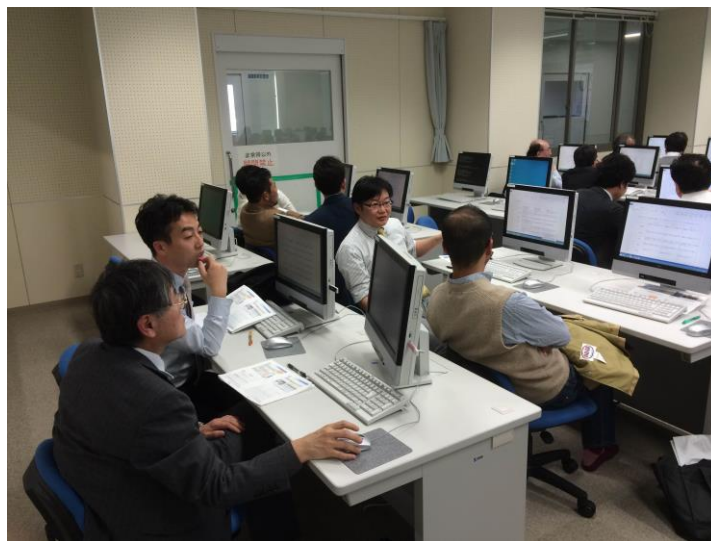


写真6 作成したルーブリックに基づく意見交換風景

作成したルーブリックは、少なくとも3回の改訂を行うつもりで、最初から完璧なものを求めずにブラッシュアップを続けるようにアドバイスもありました。また、1つの課題を複数の教員が同じルーブリックを使って評価し、教員が持っている評価基準を調整するためのモデレーション作業も重要であることが示されました。

講演会に当てた2時間は瞬く間に終了しましたが、ルーブリックとは何か、その利点は何かを理解して他者にも説明できるようになり、実際に使えそうだと感じた参加者も多かったと思います。学生と教員との双方向コミュニケーションとしても有効です。また、大学には教育以外にも多様なミッションがありますが、ルーブリックは入試や人事評価、文章作成指導を担当する教職員にも利用できることも分かりました。実際に、翌日、「ルーブリックの必要性が分かり、学科教員と科目以外への適用についても話し合った」「学科教員のルーブリックを持ち寄り、相互閲覧をしてミニFDを実施した」との報告もありました。

ところで、佐藤先生と講演前後にお話をさせていただいた中で、「FD・SDは教育改善と同時に人づくり、組織づくりです」と話されていたことが印象的でした。そのため、新採用教員の研修にFDを取り入れ、3年で100時間程度のFD活動参加義務を課す、他大学での実践例も教えていただきました。その中からFDを担うFDer（ファカルティ・ディベロッパー）養成を行い、若いFDerを中心に組織全体で教育改善が進んでいる大学もあるそうです。そして、このような推進には、大学単独ではなく複数の大学等がネットワークを形成して行くことも重要で、前任校の愛媛大学を中心に実践されているSPOD（Shikoku Professional Organizational Development Network in Higher Education）のような展開の必要性も強調されていました。本学でも、FD・SDに参加することは共通認識として理解されてきたと思います。今後はもう一歩進んで、FDerのように個々人がFD・SDの担い手になるのだという意識と具体的な活動が生まれるように、大学教育センターでは次年度からのFD・SD講演会及び研修を企画・実施していきたいと思います。

（記：平 伸二）